

「…ッあ…♡、ああ……ッ♡♡」

この圧迫感に慣れたとはいえ、相変わらずすごい質量だ。

まだ先端しか挿入<sup>はい</sup>っていないのに、思わず喉をそらしてのけぞると、

「！ぐ……ッ♡」

お父と繋がれた首が締め、ひやりとした。

慌てて頭を元の位置に戻したからよかったものの、お父も苦しかったのか、片方の目元をわずかに歪<sup>ゆが</sup>ませている。

「ご……っ、め……、おと……あ”……ッ♡」

詫びを言おうとする間にも、自重とお父の手の力によって、ずぶずぶと貫かれていく。先程あんなにも強烈な快感を拾い上げたにもかかわらず、肉洞は飽きもせず、お父のものに掻きついていく。内壁が波打つたびにゆくにゆくと擦れ合う感覚が好くて、落ち<sup>よ</sup>ていく腰がびくびく痙攣する。

「あ”あッ！♡♡」

ズンッ♡——と音がしそうな衝撃とともに最奥までお父が埋まり、びりびりと悦楽